

# 忍保神楽



－失われた祈りと遊び－

開催期間 平成31年

1月28日(月)～4月21日(日)

上里町立郷土資料館

## ごあいさつ

神楽とは、祭りで行われる芸能の一つであり、豊作や平安を祈って神々に捧げられてきた舞踊のことです。町内でも、豊作や地域の平安を祈る「忍保神楽」が行われていました。しかし、残念ながら昭和の末を最後にその伝統は失われてしまいました。

今回の展示では、残された神楽面や当時の文書から忍保神楽とは一体何であったのかをひも解いて行きたいと思います。

昭和の終わりから 30 年余り、今まさに平成が終わろうとしています。この展示がかつて「忍保神楽」が存在したことを後世に伝承する助けになれば幸いです。

郷土資料館一同

## 第一章 忍保神楽とは何か

神楽とは、伝統芸能の一種です。古くは「神遊び」と呼ばれ、踊りと音楽で神々をもてなし、豊作や平安を祈った芸能のことを指します。そのため、一口に神楽といっても、地域や時代によって様々な形態があります。

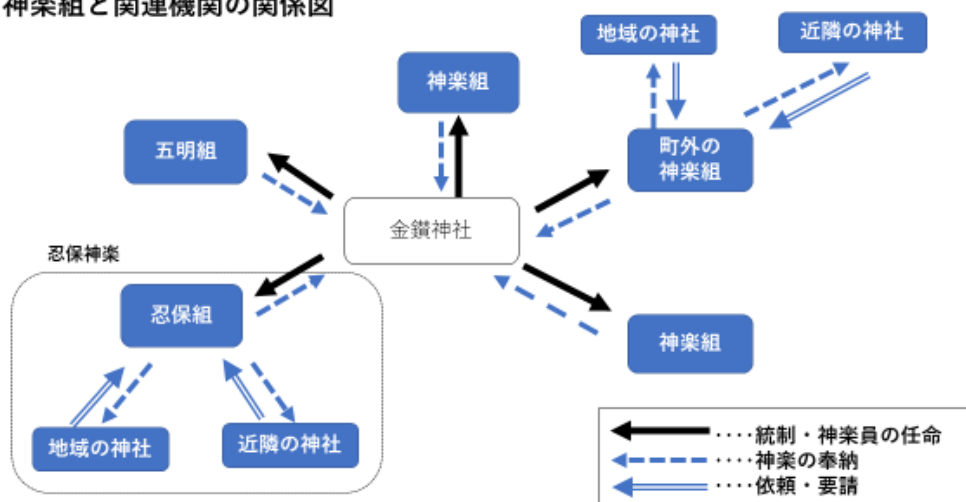
「忍保神楽」は、大字忍保の池上神社を拠点に活動していた、「忍保組」（後の「忍保神楽保存会」）によって演じられた金鑽神楽のことを指します。金鑽神楽は、神川町に所在する金鑽神社に豊作や安寧を祈って奉納された神楽のことです。明治後半の周辺の村々では、金鑽神社に神楽を奉納するため、13 の神楽組が成立しています（図1）。忍保組もそのうちの一つになります。しかし、残された資料が少なく、実際の踊りがどのようなものだったのか忘れられつつあるのが現状です。



「忍保神楽」の歴史は、忍保村の竹内仁左衛門が、金鑽神楽の神楽組である「本庄組」から手ほどきを受けたのが始まりとされています（同村の斉藤元吉という神楽愛好家がやはり本庄組から伝授されたとする説もあります）。はじめ彼らは、本庄組の一員として神楽を奉納していましたが、明治 32 年に「忍保組」として独立しました。

「忍保組」を構成していたのは、忍保周辺に住む男性達でした。神楽を奉納するグループと、雅楽を奉納するグループにより編成されていました。そのため公演の際は、神楽か雅楽のどちらか、あるいはその両方が行われました。また公演は、町内の神社や金鑽神社のほか、町外や群馬県等の神社にも奉納されており、依頼に応じて有償で行っていたことが分かっています。

神楽組と関連機関の関係図

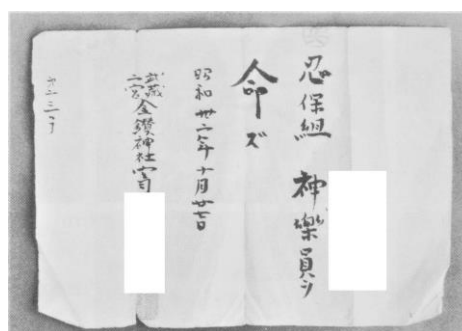


### 『金鑽神楽規約』

明治 18 年に金鑽神社が官幣中社に昇格した際に作られた規約です。金鑽神楽を公演する神楽組は、この規約に従って神楽の公演や組織運営を行っていました。また規約では、各組による金鑽神楽の無秩序な伝授や決められた場所以外での公演を禁止することなどが規定されており、金鑽神社が中心になって統制を加えていたことがわかります。

### 任命状(複製)

ほかに『金鑽神楽規約』には、神楽の演者や楽人である神楽員を金鑽神社が任命することが規定されています。この資料は、その際に発行された任命状です。宮司名義で任命状が発行されており、金鑽神社が神楽員の任命を行っていることがわかります。また、神楽員に任命されるには、各組組長（通常は所属する神社の宮司が任命された。）の推薦が必要でした。なお、複写元は埼玉県民俗文化センター編『埼玉の



任命状（埼玉県立民俗文化センター 1980 年より転載）

民俗芸能Ⅱ』1980 です。

### 請求書

忍保神楽に関する貴重な資料として、組の運営の際に作成された領収書や請求書が残されています。面などは東京の神保町の職人、衣装等は本庄市内で購入されていたことが分かります。

### 笙

この笙は、「忍保組」で雅楽を演奏する際に使用したものです。笙は、奈良時代に中国より伝来した楽器で、雅楽における主要な楽器の一つです。材質は竹製で、漆を塗った 17 本の竹を環状につなげ作られています。そのため、同時に複数の音を出すことができ、美しい音色を奏でることができます。

笙→



### コラム① 神楽の歴史～そのルーツとは～

そもそも神楽は、いつ頃から行われてきたのでしょうか。『古事記』には、太陽の神であるアマテラスが弟スサノヲの行いに怒り、岩戸に籠もったことで世界が闇に包まれたという話が伝えられています。この時、アマテラスを地上に連れ出すために、アメノウズメが踊ったダンスが神楽の起源であるとも言われています。

この神話は「岩戸神話」と呼ばれ、古くから様々な解釈が行われてきました。例えば、アマテラスが岩戸に隠れたことで世界が真っ暗になったことから、この神話は日食や異常気象を表したもので、ダンスは太陽の復活を祈った舞いであったとも言われています。一方でアマテラスが洞窟に隠れたことを「アマテラスの死」と解釈し、ダンスは死者の再生や復活を目的に行われたとする説も存在します。いずれにせよ、神楽のルーツは神や魂の力を回復させるためのダンスであったと言えます。

ところで、町内の古墳から、女性の踊る姿をした埴輪が発見されています。ひょっとすると、これも死者の復活や鎮魂を祈った古い神楽の事例かもしれません。

### 踊る埴輪（大字長浜 寺浦 1 号墳出土）→

古墳周辺から同形態の埴輪が 3 体発見されている。何故、古代人は墓に踊り子の像を並べたのだろうか。



## 第二節 忍保神楽の意義-神をもてなす-

神楽とは神を祀るための座である「神坐(カムクラ)」が訛った言葉とされています。

神坐→カミクラ→カムクラ→カングラ→カグラ

また「坐(クラ)」とは、神々が憑依するための「依り代」のことです。このことから、神を依り代に憑依させ、音楽や舞、供物を奉納し鎮魂することが神楽の目的と考えることができます。

### 神をもてなす舞台装置

#### 神楽殿

神楽殿は、神楽を奉納するための舞台のことです。池上神社の神楽殿は、正面を社殿に向けて設置されています。神々に向けて神楽が奉納されていたとも考えることができます。また、舞台裏は楽屋になっており、公演の際、演者は楽屋から直接、舞台に登場しました。町内では、池上神社の他、かつては七本木神社にも設置されており(2018年解体)、度々、神楽の奉納が行われていました。



大字忍保 池上神社神楽殿

#### ヒモロギ

漢字では、「胙」とも書き、本来は神に捧げられる供物の肉を表した漢字です。転じて、日本では神が憑依する「依り代」のことを指すようになりました。ヒモロギは木を組み合わせた台状のもので、忍保組では神楽を公演する際に神楽殿前部に設置され、中央にサカキの枝が供えられます。これにより、神々を神楽殿に招き入れることができるようになります。また、神楽の奉納中は餅や米、清酒、塩、野菜等が供物として供えられました。



ヒモロギ (小野英彦氏撮影・提供)

## 神楽面と衣装

面と衣装は、演者（神楽を演じる「俳優」）が装着します。衣装は男神を演じる場合、主に狩衣と袴の組み合わせが用いられました。また女神を演じる場合、千早に緋袴といった巫女装束が用いられたようです。どちらも儀礼や儀式に古くから使用されてきた伝統的な衣装です。

面は桐等の木材を削り、その上に胡粉や漆、絵の具で塗装し制作されます。一般に儀式等で面が使用される場合、面を装着することで演者は演じる神と一体になれると考えられていました。また、このほか、烏帽子や冠、足袋などが衣装として挙げられます。



（左）姫の面：アマテラス等の女神を演じる際に着けられた。これにより演者はアマテラスそのものとなる。

（右）狩衣：本来の形態を省略しており、貫頭衣に近い作りである。

## 鏡

面や衣装を着ける際に使われたガラス製の鏡です。移動先でも使い勝手がよいものを選んだのでしょうか。コンパクトな形状をしています。また、鏡を包むケースは手製で、着物の空き箱で作られています。



## 演目札

公演中の演目のタイトルを観客に示すための札です。「金鑽神楽」には24の演目が決められていますが、忍保組では、奉納する場所によって、その中から5～12の演目を選び公演を行っていました。また、この資料は、神楽が神に捧げられるためだけのものではなく、見物客が大勢やってくる娯楽としての性格を持っていたことを示すものといえます。



## 神をもてなす音楽 (BGM?)

### 横 笛

当館で保管する資料に忍保神楽で使用された笛は含まれていません。これは演奏者が笛を個人で用意したためと考えられます。しかし、忍保神楽では横笛の一種である篠笛と能管が使用されていたことが伝えられています。どちらも古くから使用されている楽器で、現在でも神楽の他、祭り囃子や獅子舞、能などの伝統芸能に用いられています。

### 神楽鈴

神楽で使用する鈴は、複数の鈴を柄に取り付けた形態をしています。演者が舞いながら鳴らすことで、笛など他の楽器を補助する役割を持っていました。また、一般に鈴の音は神の声に見立てられており、神の出現を示すために使われたとも考えられます。



神楽鈴→

### 太 鼓

忍保神楽では大胴と大拍子の 2 種類の太鼓が用いられました。大胴は別名「おおつづみ」ともいい、左膝の上に置き、右手でたたく打楽器です。一方の大拍子は細いバチを用いて演奏しました。



大拍子→

(小野英彦氏撮影・提供)

## コラム② 来訪する神々と人々

「神様はどこにいるのか?」と問われると、私たちは、第一に神社を想像すると思います。もちろん、それは間違いではありません。しかし、国文学者の折口信夫は、日本の神々を「時を決めて村々を訪れる靈魂」と解釈しています。またその上で、日本の祭りや神楽などの芸能は、来訪した神々を「客人(マレビト)」としてもてなすことで、神を慰め、幸福を得ることができるという考え方に基づいていると指摘します(この来訪する神のことを「来訪神」ともいいます。)

神々が村を訪れるという考え方は、他にナマハゲやお盆にやってくるご先祖様にも当てはまります。また、現代の日本で定着したハロウィンも来訪する神々?おばけ??をお菓子でもてなすという点で共通しています。そのため、近年のハロウィンの流行には、意外にも日本古来の信仰が影響しているのかもしれません。



第二章 忍保神楽の世界～神話と神楽～

「禊」

翁（おきな）一人が登場する舞いです。そのため「翁舞」ともいわれています。翁とは老人のことを指す古い言葉です。能や狂言にも同様の演目があり、会場の穢れを祓い清めるために行われるとされています。忍保神楽では、公演で最初に舞う演目とされ、やはり会場の穢れを祓うために行うとされました。



「禊」登場人物の装束一覧

大幣を持ち「禊」を舞う翁（小野英彦氏撮影・提供）

（埼玉県教育委員会 1980、県立歴史と民俗の博物館 2009 等をもとに作成）

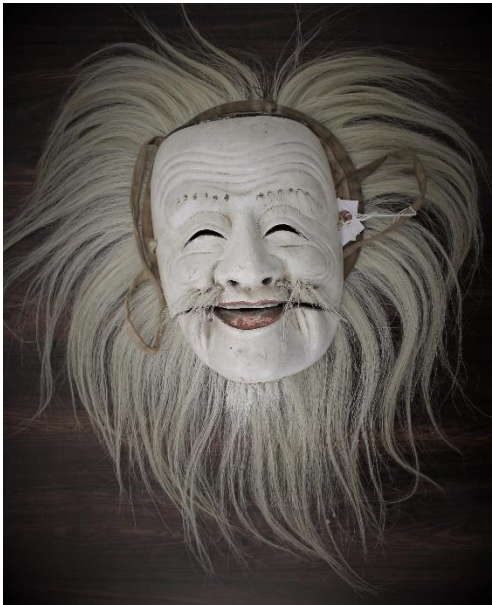
| 登場人物 | 頭部          | 上半身   | 下半身 | 採り物  |
|------|-------------|-------|-----|------|
| 翁    | 白シャグマ・風折烏帽子 | 狩衣・石帯 | 大口袴 | 大幣・鈴 |



↑ 翁の狩衣

翁面と白シャグマ（かつら）→

翁面はあごが可動するように作られている



大幣（おおぬさ）

大麻とも書きます。神事の際に穢れを祓い清めるために使用された道具です。丸材の先端に和紙で作った「シデ」がつけられています。振ることで穢れを祓うことができました。

## 「相生」

イザナギとイザナミの二神が出会い、夫婦となる様子が演じられました。日本神話では、夫婦となった二神が何もなかった世界に、様々な神々や日本列島を生み、宇宙に森羅万象を形成していきます。

「相生」登場人物の装束一覧（埼玉県教育委員会 1980、県立歴史と民俗の博物館 2009 等をもとに作成）

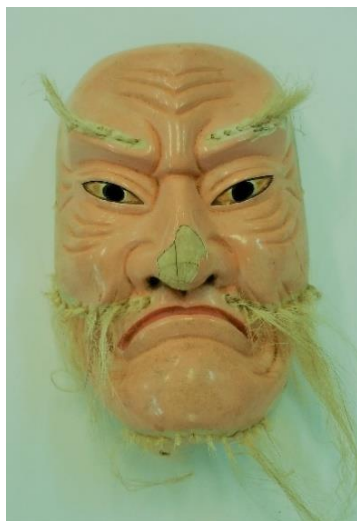
| 登場人物 | 頭部       | 上半身       | 下半身     | 採り物  |
|------|----------|-----------|---------|------|
| イザナギ | 黒シャグマ・冠  | 狩衣・石帯     | 大口袴・前垂れ | 鈴・大幣 |
| イザナミ | 黒シャグマ・天冠 | 首飾り・狩衣・石帯 | 切袴・前垂れ  | 鈴・扇  |



向き合うイザナギとイザナミ（小野英彦氏撮影・提供、この写真では首飾りはイザナギが着けている）

## 「岩戸開」

太陽神であるアマテラスは、弟スサノオの粗暴な行動に怒ったことで、岩戸（洞窟）に引きこもってしまいます。そのため、太陽が無くなった世界は、夜のような暗闇に包まれます。これに困ったアメノコヤネやフトダマ等の神々は、アマテラスを岩戸から連れ出すため思案し、アメノウズメが舞でアマテラスの気を引き、そのすきにタジカラヲが岩戸からアマテラスを連れ出すという作戦を立てます。作戦は上手く成功し、地上には光が戻ります。



(上段左) アマテラス  
(上段右) アメノコヤネ  
(下段左) フトダマ  
(下段中) アメノウズメ  
(下段右) タヂカラヲ



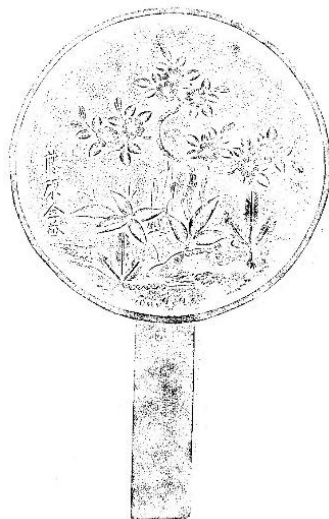
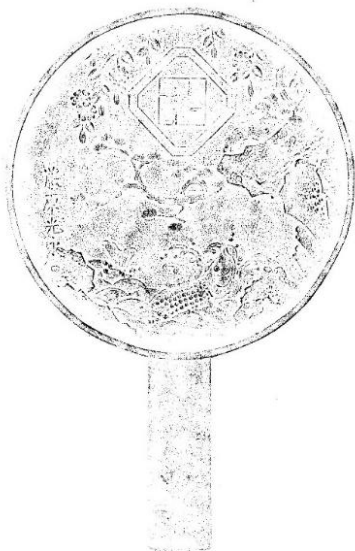
「天岩戸」登場人物の装束一覧（埼玉県教育委員会 1980、県立歴史と民俗の博物館 2009 等をもとに作成）

| 登場人物   | 頭部         | 上半身     | 下半身        | 採り物    |
|--------|------------|---------|------------|--------|
| アマテラス  | 黒シャグマ・天冠   | 千早      | 緋袴・前垂れ・白足袋 | 柄付鏡    |
| アメノコヤネ | 白シャグマ・風折   | 狩衣      | 切袴・白足袋     | 扇・鈴    |
| フトダマ   | 茶シャグマ・立烏帽子 | 狩衣      | 切袴・白足袋     | 扇・鈴    |
| タヂカラヲ  | 黒シャグマ・鉢巻   | 狩衣・甲掛・褌 | 切袴・白足袋     | 扇・鈴・鉦  |
| アメノウズメ | 黒シャグマ・立烏帽子 | 千早      | 緋袴・前垂れ     | 扇・鈴・舞幣 |

### 柄付鏡

柄が付属している銅製の鏡です。鏡は神社のご神体等に使用されるように、古くから信仰の対象となっていました。特に光を反射することから、太陽神であるアマテラスの姿と重ねられます。そのた

め、アマテラスの演者はこれら鏡を手に持ち演じていました。また、柄付鏡の背には動植物や縁起物などの図案を美しく装飾されています。展示した資料に、松竹梅をはじめとする植物や滝を登る鯉の姿が描かれています。



○鯉の滝登り（銘：「藤原光永」）

○松竹梅（銘：「藤原金益」）

○植物（銘：「天下一藤原」作）

### 第三章 忍保神楽と人々の暮らし-祈りと遊び-

#### 第一節 祈り～神々と生きる～

「あしらい」は本来、能楽の用語です。打楽器の演奏方法のことを指しますが、忍保神楽ではヒョットコのような面を被った登場人物のことを指します。「あしらい」の面は、どれもコミカルで特徴的であり、他の神々の面と対極に



あるように見えます。また、その振る舞いもふざけたり、酒に酔いつぶれたりと実

#### あしらい達

鼻や目が大きく、鼻毛まで伸びている。他の面とはだいぶ印象が異なる。ただ、表情はどことなく優しげである。

に人間的で憎めないキャラクターとして演じられます。このことから、「あしらい」は他の神々と異なり、

一般の人々を表していると解釈することができます。次に紹介する演目は、この「あしらい」が登場する演目です。これら演目からは、人々が神と生き、衣食住や健康を祈念していたことをうかがい知ることができます。

### 衣・食・住を祈る

#### 「養蚕（こがい）」

トヨウケヒメとアメノクマヒトという神が人々に養蚕を広める様子が演じられます。アメノクマヒトが掃き立て（ふ化したばかりのカイコの幼虫を餌の桑に移す作業）の準備を行い、トヨウケヒメと共に養蚕を「あしらい」に伝えます。

かつて、公演の際は必ず行われていた演目です。上里周辺はカイコを育て、繭をとる「養蚕」の産地でした。当時、絹は高価だったため、養蚕により収益を得る農家が多くありました。

#### 「種蒔（たねまき）」

トヨウケヒメとキツネが登場する演目です。トヨウケヒメから命令を受けたキツネが鋤を持って畑を耕します。そこへ「あしらい」がやってきて、作業の邪魔をします。「あしらい」はトヨウケヒメや狐から叱られるなど問題を起こしながらも、餅を作ります。

演技の最後に「あしらい」が餅をばらまき、舞は終了となります。

### 健康を祈る

#### 「久須志（くすし）」

「久須志」は「医師」とも書き、現在の医者のことを指す古い言葉です。足にけがを負った「あしらい」のもとに二人の神が現れ、薬を与えます。これにより「あしらい」のケガは無事完治し、最後に神々と舞を行うというストーリーになっています。しかし、かなり以前に廃絶しており、どのような衣装が使われていたのかなど詳細はわかっていません。

## 第二節 遊び～神も人も楽しむ～

### 英雄譚を楽しむ

「忍保神楽」の曲目は、『古事記』や『日本書紀』により伝えられる神話の世界を題材としています。そのためストーリー性をもっており、舞踊のほか、演劇としての性格を持っています。また、神々による戦いや冒険、悪者の退治等、魅力的な英雄の活躍をクローズアップしたものが多いことに気がつきます。このことは、『仮面ライダー』のような正義のヒーローの活躍を連想させます。このように、忍保神楽は神々へ捧げられる儀式であると同時に、観覧にきた人々を楽しませる遊び、娯楽としての性格も持ち合わせていました。

### 「氷の川」

氷の川は、『古事記』にあるヤマタノヲロチ退治がもとになっています。高天原を追放されたスサノヲがアシナヅチとテナヅチの娘であるクシナダヒメを大蛇（ヤマタノヲロチ）から救い、ヒメと結ばれるというハッピーエンドで幕を閉じます。また、スサノヲが大蛇を退治する際には、酒で大蛇を酔わせ、だまし討ちします。そのため、大蛇の「採

り物（演者が持つ小道具）」には甕が使われていました。



### 「氷の川」の台詞が書かれた扇

本来、金鎖神楽は台詞を発しない芸能であるが、氷の川だけは例外だった。この扇からも台詞があったことがわかる。



#### スサノヲ→

面は「天岩戸」のタヂカラヲや「諏訪海」のタケミナカタと共通している。

#### ←大蛇

ヒゲと角があり、見た目は蛇というより龍に近い。



### 「諏訪海」

諏訪の神と鹿島の神が最初、太刀と矛で戦いを行うも勝負が着かず、相撲で決着を着けることとなります。結局、相撲は鹿島の神の勝利となり、諏訪の神は鹿島の神に平伏します。また、面はタケミナカタが「岩戸開」のタヂカラヲ、タケミカヅチは同じくアメノコヤネト共通します。「諏訪の神」とは、長野県の諏訪大社に祭られているタケミナカタ、「鹿島の神」は鹿島神宮に祭られているタケミカヅチのことです。日本神話では、タケミナカタは地上をおさめていたオオクニヌシの子でアマテラスの孫のニニギに反旗を翻した神さまです。一方のタケミカヅチは、その際にタケミナカタを鎮圧した神様です。これにより、タケミナカタは諏訪で捕えられ、諏訪大社の祭神として祭られます。

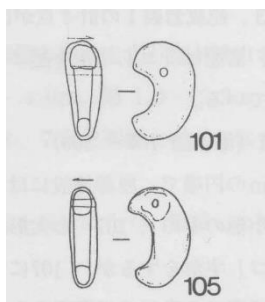


太刀を持つ神（奥）と矛を持つ神。諏訪海の一場面と思われる。

### コラム③ イザナミの勾玉の謎

展示の準備中、ふと目にとまったのがこの首飾りです。この首飾りは「相生」のイザナミを演じる際に着用されたもの（掲載写真ではイザナギが着用）でガラスとメノウという宝石で作られています。これらをよく調べると、ガラス製の勾玉は表面が滑らかで透きとおっているのに対し、メノウの勾玉の表面はごつごつしていて、手作業で作られたようにも見えます。

これらを見ているといくつかの疑問が湧いてきます。例えば、ガラス製の玉が合計 97 点で勾玉や管玉など種類があるのに対し、メノウはわずか 2 点と少なく、種類も勾玉だけです。また、メノウの勾玉の形が古墳時代に実際に使われていた勾玉と大変よく似た形をしています。特に 2 点あるメノウ製勾玉のうち 1 点は、古墳時代後期（6 世紀頃）に流行する勾玉の特徴と合致しています。これらのことから古墳時代に作られたメノウの勾玉が何かのきっかけで遺跡から出土し、首飾りとして利用されたのではないかと考えています。



右 問題のメノウ製勾玉  
左上 町内帯刀二号噴出土メノウ製勾玉  
左下 同帯刀四号噴出土メノウ製勾玉





イザナギ（右）とイザナミ（左）

この写真では、イザナギが首飾りを着用している。

#### おわりに ～なぜ、忍保神楽は失われたのか～

ここまで関連する資料から、忍保神楽には人々の神への信仰が密接に関係していたことを紹介してきました。

それでは何故、「忍保神楽」がその歴史に幕を閉じてしまったのでしょうか。忍保神楽が消滅した直接の理由は、横笛の演奏者が不足したためとされています。関係者の高齢化や不足は、現在、他の伝統芸能の継承団体も直面している問題です。実際、ほかの金鑽神楽の継承団体も同様の理由で活動の休止に追い込まれた組織も存在します。この原因には、高度経済成長により地域住民がサラリーマン化したためといわれています。つまり、高度経済成長により、それまで地域で農業に従事しながら神楽組を支えていた人々



昭和期の翁の演者

（福田正彦・隆幸 様寄贈）

が、地域外に通勤するようになり、演技や演奏の練習などができなくなってしまったということです。また、養蚕業の衰退と共に忍保神楽から「養蚕」が演じられなくなったように、人々の生活が農業から離れたことも忍保神楽消滅の遠因となったともいえます。

さらには、人々にとっての「娯楽」であった神楽も、映画やさらにはテレビ等にとって代わられてしまいます。

このように見ていくと、忍保神楽の断絶は、人々の暮らしが変わったことが原因と考えることができます。人々の豊かさを祈って奉納された神楽は、皮肉にも人々の生活が豊かになったことにより失われてしまったといえます。

昭和、平成と時代が下り、忍保神楽の記憶はまさに風化しつつあります。今後、忍保神楽を後世にどのように伝えていくのか、残された神楽面達は私たちに問いかけています。

(文責 郷土資料館 文化財係 林 道義)

#### 参考文献

##### ☆忍保神楽・金鑽神楽について

埼玉県教育委員会編『埼玉の神楽』1980 年

埼玉県立民俗文化センター編『埼玉の民俗芸能Ⅱ』2004 年

埼玉県歴史と民俗の博物館編『金鑽神楽Ⅰ 歴史・資料編』2009 年

埼玉県歴史と民俗の博物館編『金鑽神楽Ⅱ 演出・芸態編』2010 年

埼玉県歴史と民俗の博物館編『神楽を楽しむー埼玉の神楽入門ー』2012 年

鷲宮町立郷土資料館編『埼玉の神楽展～神楽の笛に誘われて～』2010 年

上里町史編集委員会編『上里町史』別巻 1998 年

埼玉民俗の会編『埼玉の祭りは今』2015 年

##### ☆神楽と信仰について

西角井正慶『神楽研究』壬生書院 1934 年

西角井正慶『古代祭祀と文学』中央公論社 1966 年

折口信夫『国文学の発生 序説』角川文庫 1975 年

折口信夫『日本芸能史六講』講談社学出文庫 1991 年

上野 誠『折口信夫 魂の古代学』角川ソフィア文庫 2014 年

##### ☆その他

鈴木敬三『有職故実図典ー服装と故実』吉川弘文館 1995 年

二木謙一『時代劇と風俗考証ーやさしい有職故実入門ー』吉川歴史文化ライブラリー 2005 年

青木 豊『和鏡の文化史ー水鏡から魔境までー』刀水書房 1992 年

中山浩彦「埼玉県内古墳出土の勾玉についてⅠ」『調査研究報告書』埼玉県立さきたま資料館 2000 年

中山浩彦「埼玉県内古墳出土の勾玉についてⅡ」『調査研究報告書』埼玉県立さきたま資料館 2001 年

#### 特別展

#### 忍保神楽

#### -失われた祈りと遊び-

発行日 平成 31 年 1 月 28 日

(令和 4 年 9 月 1 日 加筆・改訂)

発 行 上里町立郷土資料館